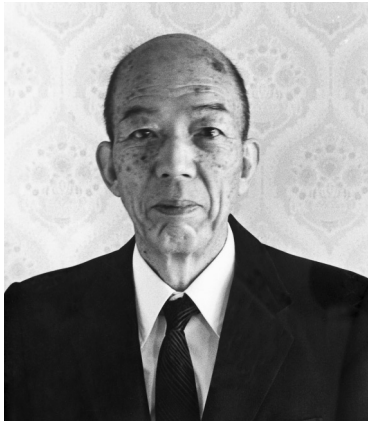
自然体の研究者・計画者　早川文夫先生を悼む



(財) 住宅金融普及協会　常務理事
水谷達郎

早川先生の業績をまとめて欲しいという依頼でしたが，とてもその任に堪えないということで辞退させていただきたいと申し上げました。しかし，他にもおられないということで，佐藤圭二先生と相談させていただき，二人の文章で追悼と業績紹介を感じていただければということで書かせて頂くこととしました。

早川先生は名古屋大学の建築学科の創設に当たって1963年，住宅金融公庫から転職され，研究・教育活動を始められ，私はその一期生となり，大学院まで早川研究室に所属しました。当時，感じたのは特に都市計画について先生自身研究方法を模索中で私たち皆で作り上げていったという感じでした。具体的には大曽根地区の再開発計画の基礎調査では高山・日笠先生の方法で商圏調査をして，核一圏構造論でまとめていきました。しかし，住宅地の再開発については今でもそうでしょうが有効な方法論を見い出せないでいました。また，ニュータウン開発については津端先生をはじめとした公団の方法論を学びながら実践的な適用行っていきました。

こうしたなかで，研究室のテーマとして都市計画より住宅問題のウエイトが高くなりましたが，この点では早川先生は得意な分野として研究を主導され，「木賃アパート」の居住・経営調査に取り組みました。この時，先生は西山先生と親しく，その考えや方法を尊敬されていることが良く分かりました。こうした中で，食寝分離論や就寝分離論の原点を研究しながら居住水準の向上のための方法論を考えました。さらに，こうした居住水準の問題を考えてゆく過程で，地域の階層構造問題を明らかにすることがテーマとなり，住宅問題からみた，都市計画の課題といったところが，研究室の問題設定となったと感じました。

その後，偶然私自身が住宅金融公庫に就職することとなり，早川先生の行政官の時代や，公庫の時代のことに触れる機会を得ました。研究室時代でも時々は話題が出たのですが，あまりこの時代のことは話されませんでした。西山先生から西山先生の住宅営団時代に監督者として関係があった話等なかなか興味深いものでした。戦後は住宅問題の解決のために色々取り組まれたようですが，印象に残っているのは一般の方向けの住まい方読本を何冊か書かれており，そこで生活改善の提案をされていることでした。確かに，公庫で働くようになって，主に個人の住宅水準の向上が目的としている公庫の仕事との関係ではこうしたことが最も身近なテーマであったのだと思います。その文章を読んでみて，意外といっては何ですが，生き生きとしてこうした仕事に楽しそうに取り組んでおられるとのを感じました。

形はともかくこのような社会との関わり方は早川先生が一番望んでおられたように感じます。私自信は卒業後研究的な活動についてはあまり知る機会がなくなったのですが，先生の様々な社会的な活動へのコミットの仕方に現れているように思います。

数年前に，公庫のOB会でお会いした折りに，もう出かけてくることはないから，元気でやるようにと本当に明るく言われたことが最後の思い出となりました。

早川先生の業績とお人柄

中部大学工学部建築学科教授
佐藤圭二

早川文夫先生が，95歳の誕生日を目前に2006年3月24日に逝去された。戦前から戦後にかけて，日本の都市計画・住宅政策の立案者であり施行者であられたことと，この経験を踏まえた実践的な研究者として，さまざまな社会情勢の中に身をおかれながら，常に自立した立場を貫かれてこられたことに，私は，今改めて敬意を表したい。また同時に，このことが少し身の引き締まる思いを呼び起こしていると感じている。

先生の行動と思想を説明するには，民主主義者であるとか，進歩主義者であるという言葉はどうもぴったりこない。何か根っからの自然人であり，その気持ちのままの発言や行動が，結果として自由を尊重し，民主主義的な行動者として人々の共感と尊敬を得てこられたように思う。大正デモクラシーの落とし子であるとは，どなたかの評価であるが，そんな雰囲気を感じる先生であった。

先生のご活動は，戦前から戦後にかけてのオールジャパン行政マンとしての時期，1965年以降の名古屋大学教授となられた以降の地域的な研究活動の時期に分けられよう。

行政マンとしての先生のご活躍は，戦前戦後の日本の住宅政策を中心的に担って来られたと言っても過言ではないであろう。

昭和15年に内務省から厚生省社会部住宅課に移られ，戦前の住宅政策の立案と実施を手がけてこられたことは，「証言　日本の住宅政策2章」（大本圭野著　日本評論社1991）に詳しい。また，自著「日本の住宅政策・住宅運動」（住宅問題講座第1巻4章:戸谷英世氏と分担共著，有斐閣1981）はその軌跡ともいえよう。厚生省時代は，軍部と競争しながら資材を確保し労働者住宅の供給に努力された。軍部の横暴との闘いが仕事であったという。資材統制令と地代家賃統制令や住宅営団の設立，営団の住宅基準の制定等主要な仕事をことごとくなさってこられた。住宅営団の技術者であった西山卯三先生や市浦健先生とそれを政策面で支えた早川先生の交友は，こうした関係で深められていた。この間に，実現はしなかったが住居法制定の準備をされ，また昭和16年に日本最初の住宅調査が行われたが，その調査票の設計は早川先生の手で行われた。

戦後は，また，資材の統制，地代家賃の統制などをいち早く行いながら，住宅復旧の計画や基準づくりに奔走された。これらの統制令のために先生は「ずいぶん憎まれた」そうである。戦後の住宅不足数420万戸という数値は早川先生の推計であり，「目標値を多めにして実現戸数を少しでも増やす・・」は大本先生の「証言」で初めて知ったことである。

さらに昭和25年に立法設立された住宅金融公庫に移られて，融資基準の設定などに関わられる。その後の公庫の順調な成長の中では，水谷さんのお話にある「住生活と住まいの近代化」を普及させるための冊子作りが先生の主要な仕事のひとつであった。先生の柔らかく分かりやすい文章は人々を惹きつけたに違いない。

1965年名古屋大学工学部建築学科教授就任は，先生の活動を教育と研究に一変させる。名古屋大学時代の先生と研究室の成果は「生活・住宅・環境-名古屋大都市圏の都市・住宅研究（株:E&S出版部1975年）」にまとめられている。この本の表題は先生の名古屋大学時代を総括し，また，それが本の冒頭に最終講義録として残されている。

研究成果としては，第一に，先生自身が直接研究された住宅問題研究として，木造アパート研究（水谷氏との共同），名古屋大都市圏の住宅問題の特徴，名古屋市の郊外都市の住宅問題などが多角的に調査されている。先生の行政経験が活かされている密度の高い研究群で

ある。住宅研究は運動と結びつき，先生は中部都市学会会長として親交の深かった日本都市学会長磯村英一先生に協力され，バンクーバーで行われたハビタット（国連人間居住会議）を成功に導くことに努力されている。

第二に，不良住宅地区の実態研究と改善の提案および都心居住研究は，今で言えば住環境整備研究である。学会東海支部としての多くの研究者や行政職有志を巻き込んだ総合研究であり，また実践的なプロジェクトに繋がる研究である。名古屋「栄東」の町づくり運動を支えてきた長峯晴夫先生や服部千之先生などとの共同研究である。第三の特徴は「環境」と題された内容にある。この課題は幅ひろく，伊勢湾地域の開発問題や21世紀への開発問題（人間と環境），大都市周辺地域の環境保全問題など，広域的な開発と保全の問題研究がひとつのテーマであり，経済・地理・衛生学分野の先生方との共同研究として展開されている。名古屋都市圏の都市計画研究者の代表としての役割を，常に担ってこられた。

その一方で，早川研究室の課題として，都市交通問題や障害者の自立のための計画についての研究が進められている。日比野正巳氏（現純心大学教授）を中心としたグループと名古屋大学医学部公衆衛生学水野宏研究室との共同研究であった。

この研究はやがて，名古屋都市高速道路建設の是非論争として大きくクローズアップされ，市民の建設反対運動を経て，名古屋市長選挙の争点となる。早川先生は名古屋市が設置した「都市高速道路調査専門委員会」（1次と2次の2回）の座長としてとりまとめを行われた。この報告は依頼した名古屋市の意図と異なる「高速道路の見直しないしは即時停止」を勧告する異例な結果となった。10名の委員のうち，土木系の2名の委員を除く8名が建設反対の態度を表明したのである。この8名の委員の多くは通常は積極的に行政施策に協力してきた方々であったから，意外な結果ともいえるが，大都市内の交通施設として高速道路はふさわしくなく，将来を考慮すれば公共交通を優先させるべきである，という至極当然の結論であったといえる。但し推進する立場の名古屋市政を真っ向から批判したことは画期的であった。

早川先生は，調査専門委員会では当然のごとく高速道路建設に反対されたが，そればかりではなく，ご自身の居住地近くをこの高速道路の支線が通る計画に対する反対運動にも住民代表として先頭に立たれた。運動の結果，この路線は地下式に変更されることになり，運動は住民側の勝利となった。しかし，理論家としても，行動者としても，早川先生の名前は建設系行政側には強い印象を与え，以後行政側からは疎んじられるようになってしまう。このことは，地元の行政にとって，たいへんなマイナスであり残念なことであるが，先生はこのことについて不満も漏らされたことはない。だれがなんと言おうが，自分は思ったとおり発言し行動する，ごく自然に，ということであろう。

名古屋大学を退官された後，名城大学教授として在任されるが，この間は役所よりも民間人からの誘いでユニークな活動をされている。

そのひとつに1984年の住宅研究所の設立がある。早川先生は住宅研究所の理事長として，多くの住宅研究者や供給者の協力により，研究と住宅思想の普及活動を行って来られた。所報や研究論文集発行と講演会やシンポジューム等の開催等の活動は5年間にわたって行われている。このほかに，分譲マンションの維持管理のための技術蓄積を目指す建築家の活動への支援もなさっている。

このように，いつも変わらず淡々として「呼んでくれれば誰とでも付き合うよ」というのが先生であり，高級官僚であったとか，旧帝大教授であったとかは無関係な自然体が先生に似合っていて，それが多くの人に敬愛されたのだと思う。

名古屋大学退官後に受勲の話があったとき，先生は辞退された。しかし周りの人からそれでは後の人が困るから，といわれて受けることにされた。しかし，「N首相からは貰いたくない」といって受け取りには行かれなかった。折しも始まった保守的な政治風潮と規制緩和の路線による都市計画や住宅政策の後退思潮への批判をこのような形で示された先生に，私は心の中で喝采した。

葬儀の後，久しぶりに旧早川研OBは近くの喫茶店に集まりコーヒー一杯で盛り上がった。この盛り上がりが一段落したとき「ではお先に」と少し早めに帰られるのが早川先生であった。